フットサル「ハヤカワカップ'04」開催される――48チームが参加して熱戦

「商品総額6万円」のフットサル大会に、参加した学生は400人以上！

04年12月4日と5日の両日、昭和記念公園で開催された「ハヤカワカップ'04」。スポーツを通した地域振興をテーマに、商学部・早川（宏子教授）ゼミで企画したイベントである。全48チーム、中大生以外にも多くの学生や専門学生らが参加するという予想外の広がりから、国の民間プロジェクトの支援計画である「夢プラン」の認可も得て、国の支援の下で行われる大会ともなった。大会の模様を報告しよう。

早川ゼミ・商学部4年　長谷公人（はせまさと）

「決勝と3位決定戦の時間をずらそう！」

大会実行委員の1人が言った。

「フィナーレである決勝戦と3位決定戦の観客を少しでも増やそうよ。盛り上げるための工夫をしなくては！」。参加者の多さといい、序盤の立ち上がりの試合では、にぎやかな応援もあって盛り上がっていたのに、上位チームが絞られていくにつれて敗退したチームは応援団もろとも去って周りが閑散となっていく。この種の大会ではありがちだが、これでは寂しい。大会をゼロから作り上げてきた大会実行委員にとっても、決勝戦ではそれまでと同じく、いや決勝戦にふさわしく盛り上がってほしいという気持ちが本部の誰もの共通した願いだったのである。

提案は即決で採用され、観客を呼び集めたところで3位決定戦は午後3時から、決勝戦は10分遅らせて3時10分にキックオフ。白熱の試合模様となったのだった。

国の「夢プラン」の支援も得て

「夢プランの認可申請すればいいよ」とアドバイスしてくれたのは昭和記念公園の職員の山野さんだ。おかげで、グラウンド使用料はタダになった。

募集チーム数48組が果たして集まるだろうか。それが一番の心配だった。10月の上旬からビラ配りや立て看板の設置などをし、ゼミ生が交代で生協前にブースを設け参加チームを募集した。地道な努力が功を奏したのか、10月下旬には48チームのメドが立ち、ホッとした。

「巨バナナ」「竜学生」「夏の海人」…

サークル出場の「HOTS」、「CCA」、「バンブー」、「小バナナ」、「巨バナナ」、留学生だけで構成された「竜学生」、バイトを通じて結成された「CAST」、ユニフォームもゼミで作ったという「御船ゼミFC」……チーム名も構成もとりどり、ユニークなチームぞろいである。

競技レベルも各チームともにあまり差がなく、どのチームが勝ち上がってきてもおかしくなかった。

予選リーグでは「ダンサー・イン・ザ・ダーク」と「夏の海人」の2チームは勝ち点・得失点差・得点数とすべてが並び、大会規定によってジャンケンで「ダンサー・イン・ザ・ダーク」が決勝トーナメントへ。拮抗した場面が多く、決勝トーナメントではPK戦がじつに5試合、という〝手に汗握る〟熱戦模様となった。結果、「小バナナ」、「HOTS B」、「ぷっちモⅡ」、「クラージュ」の4チームが勝ち残った。われわれ本部は「早川ゼミOB」とともに試合に出場したのだが、あえなく予選敗退……。

3位決定戦は、他大生も加わって先に行われた「TAMA CUP」でも上位に入っている「ぷっちモⅡ」と、高校からの友人というチームワークを誇る「クラージュ」の対戦。そして決勝戦のカードは、一人

ひとりの圧倒的な力で勝ちあがってきた「小バナナ」と、サークルの結束力で勝ち上がってきた「ＨＯＴＳＢ」の対決になった。

大会実現まで難題いろいろ

グラウンド脇の大会本部のテントでは、「よくここまでできたよね」といった会話が交わされた。大会にこぎつけるまで、まさに苦難の連続だったからだ。昨年夏の企画段階から、先輩たちには「本当に大会ができるのか？」と実現を懸念する声が強かった。サブゼミでもなかなか全員が顔をそろえることができなかった。秋に入ってもまだ意見集約ができない課題を抱えつつ、一方ではスポンサーの獲得やプログラムの作成など、外部へ向かって動き出さなければならない。待ったなし、の局面に立ち向かったのだった。

そんな経過を振り返ってみると無事に決勝戦を迎えている目の前の情景がとても信じがたく感じられたのだ。

「なかでもスポンサー獲得の問題が一番つらかったね」と誰もが口にした。参加メンバーの募集は不安だったが結果的にうまくいってみると、スポンサー探しが心理的にもきつかった。スポンサー獲得のスタートでは順調に飲料メーカーからの物品提供を約束してもらったが、その後は行き詰まり、11月初めの時点ではまだ1件だけ。危機を感じたゼミ生全員で近隣商店に電話をかけたが、「学生がそんなことできるの？」、「営業はお断りだよ！」などと断られる場合が多かった。ようやくアポイントメントを得て約束の日時に伺っても、「店長は今外出中だよ」、「明日また来てくれる？」、「今日だったっけ!?」といった具合で忘れられていることもしばしばあった。

冒頭の「決勝と3位決定戦の時間をずらそう！」という発案は、「苦労をともに味わった全員で決勝戦を見たい」という私たちの大会への思い入れから出た一言だったのだ。

ハットトリックまじりの決勝戦 実力派「小バナナ」が逆転Ｖ

さて、試合のほうである。試合開始時刻の3時を迎えた。「ぷっちモⅡ」対「クラージュ」の3位決定戦。期待は高まったが、すでに優勝の可能性がなくなってモチベーションが低下したのか、この2日間で計6試合目の疲れからか、両チームとも準決勝までの精彩を欠き、「消耗戦」のような展開に。結果はＰＫ戦の末「ぷっちモⅡ」が3位。試合後の選手たちからは「疲れたー」というつぶやきがもれた。

対照的に疲れなど微塵も感じさせなかったのが頂点の決勝戦だ。

男性ばかりの「小バナナ」ベンチと、女性の声援の交じった「ＨＯＴＳＢ」ベンチの応援も、試合のムードを盛り上げた。決勝戦にふさわしい好ゲーム。試合前の「小バナナ」断然有利の予想に反し、「ＨＯＴＳＢ」が菅沢君のハットトリックの活躍などで常に先手を取ってゲームを進めていった。彼のこの活躍は、急きょ「ＭＶＰ」以外の個人賞を作ろう、となったほど素晴らしいものだった。ところが試合後に彼が「体力の差が出た」と悔やんだように、残りの3分で「小バナナ」が地力の差を見せつけ3点を奪って逆転、栄冠を手にした。こうして2日間にわたった「ハヤカワカップ '04」は感動のうちに幕を閉じた。

閉会式。「実行委員も参加の皆さんも、誰もがみんな楽しく過ごせたことが何よりもうれしいです」という終わりの言葉は、実行委員全員が素直に感じた感想である。

帰り際に出場選手たちから「楽しかった」「来年もまたやってね」と言葉をかけられた。今までの苦労が一瞬に吹っ飛んでしまうほどうれしかった。来年以降も後輩たちに引き継いでもらい、この大会が大学とそれを取り巻く地域の振興の一助として発展できたらと心から感じた。

決勝戦後、大会実行委員も一緒に